JAPANESE JOURNAL OF INFLAMMATION
EDITORIAL*We should do works which remain
in the history of medicine*

Ryuichi Kato

歴史に残る研究をしよう

加藤 隆 一*

最近、多くの若い人が熱心に研究をしており、日本の医学・生物学の将来にきわめて頼もしいかぎりである。これら若い人に、
「なぜ君たちはそんなに熱心に研究をやっているのか」
と問うと、
「研究がおもしろいからやっている」
という応えが返ってくることが多い。

確かにおもしろいことが研究にとって一番大切なことである。ただ、もし、それらの研究がほとんど引用されずに、2, 3年後には消えてしまったら、若い膨大なエネルギーと、時間と、お金を掛けたそれらの研究は、きわめて虚しいものになる。

オリンピックには参加することに意義があるとよくいわれるが、やはり勝つことが肝要であろう。大学などには、先端のサイエンスの研究に参加していることに自己満足している若い研究者もかなり多く見られる。

現在の科学の進歩はきわめて速く、激しい競走（競争ではない！）が日々行われており、特に遺伝子クローニングに関しては1等賞はあるが、2等賞はないとされている（他の分野では2等賞も3等賞もあったのではあるが……）。

それゆえ、研究に当っては、よほどの天才ではないかぎり、他人よりいかに早く研究を開始するか、他人よりいかに効率よく研究を行うか、研究要員をどれだけ投入するか、いかに上手に論文をまとめるか、などが勝敗の決め手となることが多い。半年でも1カ月でも早く論文をだし、それが消されないように継続的によい仕事をしていく以外に凡人が歴史に生き残る道はない。

炎症に関する研究も10年前とは異なり、それらに関与する諸因子が見いだされ、それらの相互作用、または細胞の置かれているマトリックスなどの環境因子は、役割も重要視されてきている。しかし、現在の細胞・組織培養の技術、物質の精製の技術、遺伝子クローニングの技術の進歩により、種々の生理活性物質の分離・同定・生産が以前にくらべて格段と容易になり、炎症に関する現象を、それらの物質を *in vitro* および *in vivo* で追えるような時代になってきたといえよう。これら新規因子の分離・構造決定・生理作用解明の仕事は若い研究者が歴史に残る研究として行えるもっとも輝かしいものであろう。

in vitro の系で明らかにされたこれらの因子の生理機能が、他の細胞の存在下、組織内でいかに発現され、どのように役割を演じているかが明らかにされてこそ、その制御機構も明らかになり、それらを促進したり制御する薬も開発されるであろう。

炎症に関する分子レベルでの研究ははじまったばかりであるが、近い将来には免疫・炎

* Department of Pharmacology, School of Medicine, Keio University
慶応大学医学部薬理学教室

症薬理学として薬理学の最重要テーマの一つになるであろうし、中・長期の経過における生体の反応・防御機構の中心の課題として免疫・病理学の重要テーマとなろう。それには分子レベルから細胞、組織、個体レベルでの研究の発展が必要であろう。さらに新しい生理活性物質の作用機序に基づく、新しい薬も創製され、診断、治療法などの発達とともに新しい病因機序も解明され、炎症に関する研究は医学のみならず、quality of life の中心課題に発展していく日もくるであろう。

若い優秀な研究者が、短時間の生体の応答機構に興味を持つばかりではなく、炎症という複雑な機構を、それらに關与する生理活性物質の解明という観点からチャレンジして、歴史に残る仕事をすることを念願したい。